

# 地域を活動の場とした中学生による美術作品制作の意義

## —中学校美術科と地域の自治組織の連携—

志藤 浩仁

### Abstract

This study aims at exploring the educational significance of utilizing the local community as a workplace of art in the art classes in junior high schools. After developing the possible forms of collaborative activities based on the various examples done in the past, these examinations the significance of such activities done in cooperation with the local people and the community. As a result, it proves that there are mutual gains between the students and the residents in the local community in collaborative art activities and that there are positive effects on students in terms of art education and other educational effects. The future research will be to detect the changes and development of artistic skills and competence through these art activities, and find a way of describing them.

キーワード……美術 中学校 地域 連携

### はじめに

屋外でのインスタレーション制作活動，美術館での鑑賞活動など，活動の場を学校から飛び出し地域に求めると生徒の姿が生き生きする。中学校美術科の授業を担当する教員（以降，中学校美術教員と記述）として、直感的にそこに活動の意義を感じる。だが、具体的にどのような意義が存在するのか問い直すと判然としない。

地域を活動の場とした教育活動の必要性を教育法制度に求めると次の2点があげられよう。1つは2006年改正教育基本法第十三条である。「学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力」の必要性が明記され、学校、家庭、住民その他の関係者が教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚し、相互の連携協力を努めることが規定されている。地域の子どもの教育環境にふさわしい場を創造することもこれに含まれると解される。もう1つは2008年告示中学校学習指導要領（以降、指導要領と記述）である。指導要領第1章第4の2の(14)に「学校がその目的を達成するため、地域や学校の実態に応じ、家庭や地域の人々の協力を得るなど家庭や地域社会との連携を深めること」、指導要領第2章第6節第3の2の(1)のエに「表現の材料や題材などに

については、地域の身近なものや伝統的なものも取り上げるようにすること」と明記されている。

新潟市中学校教育研究会美術部会が毎年発行する『指導のアイデア集』<sup>1)</sup>過去3年（2009年～2011年）分によると美術の授業や美術部による活動で生徒が地域に出かけ表現活動する題材は、全157事例の中で6事例（うち3事例は同一教員による実践<sup>2)</sup>に過ぎない。地域を活動の場とした美術の表現活動は中学校美術教員にとって興味の対象となっていないか、活動の方法が手探りの状態にあるといえよう。その背景には「地域を活動の場とした中学生による表現活動の準備には多大な労力が要求されるのではないか」という不安が中学校美術教員にあり、さらにその奥底には教員の多忙感が潜んでいるものと推察する。

教員1人あたりの年間授業時数をアメリカ、フランスと比較すると「日本1400時間、アメリカ1080時間、フランス918時間」<sup>3)</sup>の報告がある。また「諸外国では、多数の専門的・補助的スタッフが配置されているが、日本では、教員が授業以外に広範な業務を担当している」<sup>4)</sup>とされる。日本の中学校美術教員は、授業だけでなく授業以外の業務に多くの時間と労力を費やさされている現状がある。そのため題材開発、教材研究については、的を絞り効率的に行わざるを得ない環境におかれている。地域を活動の場とする学びの意義が何かを明らかにし、中学校美術教員がそこに価値を見いだすことができれば、多少の多忙感があっても実践の輪が広がり題材開発、教材研究が進み、学習指導要領で求められる活動が多方面で展開されるようになるのではないだろうか。

本研究では、はじめにさまざまな実践例を概観する中で活動の方向性を探る。地域を活動の場とした美術作品制作を題材とした実践を通して、地域を活動の場とした中学生による美術作品制作の意義を明らかにすることを目指す。実践する上で地域住民の理解と協力を得やすくするため、中学校と地域の自治組織との連携を意識的に取り入れているため、本稿における「地域」の範囲を中学校区とする。

## 1 公共の場における美術作品制作の概観と実践の方向性

### (1) 公共の場における美術作品制作でのアーティストと市民の位相

2012年に新潟市で開催された第2回水と土の芸術祭<sup>5)</sup>ディレクター丹治嘉彦は芸術祭を振り返り「市民運動的な盛り上がりや市民が作家のプロジェクトをこれからどのようにハンドリングしていくかについての動きが出てきた」<sup>6)</sup>とし、藤浩志（アーティスト）の事例を取り上げ次のように述べる<sup>7)</sup>。

手部（市民サポーターを巻き込んだ組織）を作って作品制作をした。会期終了後、手部は藤の手から離れ、部員がオリジナルの活動を行っている。またナデガタインスタントパーティー（アーティスト集団が中心となり市民を巻き込んだ組織）は旧新潟市立礎保育園を会場とし、焼き物ワークショップ

ブを行った。会期後、その場を残し、市民で運営するまでに変わってきた。

丹治は市民が美術作品やアーティストに対し、受け身でなく能動的に働きかける動きが生じている点と、公共の場での美術作品制作の継続的实施によって市民参加型の制作形態が市民の意識に変容をもたらしている点を指摘した。市民の受動的参加から能動的参加へシフトしたということだ。これは、地域を活動の場とした美術作品制作活動が持つ可能性と方向性、継続的实施の意義を示唆しているといえよう。

林容子はパブリックアートが街作りに与える効果の1つに、「アートの社会化。アートへの関心度のアップ（一部の人にとっての趣味の対象でなく、アートは社会一般の人々にとって生活の一部になりつつあるし、なるべきである）」<sup>8)</sup>ということを挙げている。つまり、美術作品は厳重な管理下にある美術館に展示され美術を愛好する者のためだけにあるのではなく、日常生活の中にも存在するものであるということ、市民が認知するのにパブリックアートが役割を果たしているということである。

川口宗敏はパブリックアートのあり方について「初期構想段階から市民が参加できるようにし、設置後も維持・管理に市民が参加できるようなプログラムの必要性」<sup>9)</sup>を主張し、「『アート』の部分の重視から主体的参画者の『パブリック』の部分の意義の問い直しを行うべき」<sup>10)</sup>とし、市民参加型への転換を示した。

アーティストが自分の芸術性を第一に考えた美術作品を地域に設置する様相から、市民が地域のアート設置に能動的に関わる様相へのシフトが起きている。すなわちアーティストと市民（パブリック）の位相の問い直しである。川口の指摘は地域を活動の場とした美術作品制作のあり方を考える上で示唆に富んでおり、美術教育の文脈の中で教員、学芸員、アーティストなどの授業者（講師）と生徒（受講者）の立ち位置を考える上で傾聴に値する。

地域を活動の場とした中学生による作品制作活動も、将来的には中学校美術教員主導の活動でなく、中学校・中学生と地域住民が協働的な活動を通して絆を深め、美的観点で共に能動的に地域環境を「創る」活動へシフトすることが目指すべき姿であろう。

## (2) 地域を活動の場とした美術作品制作の意義

本節では、先人の言説の中から、地域を活動の場とした美術作品制作の意義の所在を探ることとする。

イギリスの政治学者バーナード・クリックは中等教育で生徒に身につけさせたい能力について「公共生活に影響を及ぼそうとする意思を持ち、その能力を有し、またその技能を備え、発言したり行為したりする前に事実に基づいて熟考する批判的能力を備えた、積極的な市民」<sup>11)</sup>であるようにすること、「若者一人ひとりがコミュニティーへの新たな関わり方を大胆に発見し、自分たち自身で行動してゆくようにすること」<sup>12)</sup>とした。生徒が自分たちの住む地域の環境(コ

コミュニティーの現状）に目を向け、評価し、自分たちがのぞましいと考える姿へ変えようとする力を育むことは、我が国の中等教育にも当てはまるのではないだろうか。また、ヴィゴツキーは公教育における芸術教育の意義について「美の教育を生活そのものの中に持ち込むことに重要な意義がある」<sup>13)</sup>とした。これらは生徒らの活動を単に実生活場面の中に落とし込むだけでなく、社会のニーズの中に位置づけることの意義を示唆している。また、ハーバード・リードは「中等学校のカリキュラムは、常に、地域的関連性とでもいうべきものを、持つべき」<sup>14)</sup>とし、地域の要求に応えることの必要性を主張した。生徒の学習について、ヴィゴツキーは日常生活との関連、リードは地域のニーズとの関連を持たせることの必要性を述べている。

中学生による地域を活動の場とした美術作品制作では、地域が抱える問題の解決に中学生が共感し能動的に活動を組み立てようとする意識が芽生えれば理想的である。そのためには、企画段階から中学生と地域住民が交流しながら活動展開される必要があるといえよう。

### (3) 継続性の確保

地域を活動の場とした中学生による美術作品制作の事例はすでに報告されている。例えば川崎市立臨港中学校は文部科学省『豊かな体験活動推進事業』の委嘱を受け「総合的な学習の時間」として2002年度はJR貨物線下トンネル壁画制作、2003年度は駅のホームへの壁画設置を実施した<sup>15)</sup>。生徒が主体的に活動している場面も報告<sup>16)</sup>されており、全校生徒、中学校職員、地域住民など大勢の人々を巻き込む、地域を活動の場とした中学生による美術作品制作活動の先進的な取り組みといえよう。だが、事業委嘱を終えた2004年度以降活動が途絶えており一過性の取り組みとなった。文部科学省の研究指定終了後も継続的に実施するための活動の構想、補助金がなくなっても継続できる仕組みづくりが欠落していた点が要因と推察する。また、活動の展開にあたりさまざまな組織に性急な凝集性を求めていたため、中学生、学校職員、地域住民にとって負担感が大きく、継続できなかつた可能性があるのも否定できない。

地域を活動の場とした中学生による美術作品制作を継続的な活動とするためには地域のニーズが活動の起点となり、緩やかな凝集性のもと学校と地域が連携し活動展開される必要があるのではないだろうか。中学校美術教員又は中学生が地域の課題を探り、それを解決する活動の一つとして美術作品制作を位置づける。すると地域は中学生の地域貢献による恩恵を得、中学校は地域を教育の場として活用できる恩恵を得る互惠関係が生じ、継続的实施が期待できるものと推察する。

## 2 実践題材「中学生によるトンネル壁画制作」の概要

本章では、前章まで述べたことを踏まえ実践した題材の概要を述べる。筆者勤務校（新潟市立大形中学校、生徒数417名、学級数14学級、本務教員数29名、2012年5月1日現在）美術

科と新潟市大形地区青少年育成協議会（以降、育成協と表記）が連携し、実践した題材「国道7号線バイパス海老ヶ瀬付近トンネル壁画制作（以下、トンネル壁画と表記）」である。

## (1) 実践の背景

### ①題材開発のきっかけと題材設定の理由

本題材実現のきっかけは、2012年5月、勤務校学区内にある地域自治組織の一つである育成協の会長と勤務校美術科担当教諭（松木靖裕と筆者の2名）による雑談である。育成協会長から「学区内に不審者が出没するトンネルがあるので、そこに絵を描く事で不審者が近寄りにくい雰囲気に変えることができないだろうか」との発言があった。中学生が地域を活動の場とした美術作品を制作する絶好の機会ととらえ、実現の可能性を美術科担当教諭で検討した。その結果、描画材料予算を5万円程度確保できれば夏期休業期間を活用し実現可能と判断し、育成協会長に連絡する。

その後、育成協会長は予算確保とトンネル周辺住民への計画周知を担い、教員側は生徒対応、計画立案、関係諸機関への連絡と助成依頼、道具・材料準備を担当することとし、実施に向け動きだした。

### ②題材への期待

トンネル壁画を描画するのは生徒らにとって初めての経験である。よって、壁画の大きさに躊躇しながらも活動のダイナミックさを魅力的に感じ意欲的に取り組むことが予想できる。また、完成した作品は生徒たちの通学時など日常生活の中で地域住民も含め鑑賞可能となる。以上の活動を通して生徒は美術作品が生活を豊かにする役割を果たすことを体感できるものと期待する。

### ③目指す生徒像

地域社会のニーズに基づいたトンネル壁画制作を通して、自分たちの住む地域環境を美的観点で評価しようとする生徒。

### ④活動の概要

- a. 指導者：勤務校美術科担当教諭（松木靖裕、筆者）
- b. 実施日時：2012年7月27日、7月30日～8月3日 計6日間 各日9時～11時
- c. 参加人数：28人（のべ参加人数131人）
- d. 場所：国道7号線バイパス下トンネル38.8m（新潟市東区海老ヶ瀬474番地1付近）

## (2) 本題材における育成協会長の関わり

生徒と地域（地域住民）をつなぐ上で地域住民の代表である育成協会長が果たす役割は大きいと考えた。

本題材では、3つの場面で育成協会長が関わる。1つ目は、描画材（アクリルガッシュ、マ

地域を活動の場とした中学生による美術作品制作の意義（志藤浩仁）

スキングテープ、はけ等）購入のための予算確保である。育成協、大形地区コミュニティー協議会、大形地区防犯組合から合計5万円の予算確保ができた。2つ目は、周辺住民に対する活動への理解の呼びかけである。育成協会長を通して、周辺住民からトンネル壁画制作への理解を得た。3つ目は、活動期間中の中学生の事故防止（交通安全確保、体調管理）への協力である。育成協会長から、事故防止のためトンネル通行車両の交通整理を担当してもらうのに加え、熱中症対策として、周辺住民に依頼し水分・塩分補給のための飲食物の準備が可能となった。

### **(3) 活動に関わった組織**

勤務校美術科と育成協が中心となり企画・運営する。7月10日に国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所からトンネル壁画制作の許諾を得る。7月17日に大形地区コミュニティー協議会、大形地区防犯組合から予算面での支援を得る。7月20日に新潟東警察署大形交番に活動場所周辺の定期的な巡視を依頼するとともに、活動場所に隣接する新潟自動車学校から電源、水道、トイレ使用の許諾を得る。

### **(4) 実践の経過**

#### **①参加者の決定**

教育課程上、本題材を美術の授業として位置づけることができれば地域の中学生全員がトンネル壁画制作を体験できる理想的題材となる。しかし、計画立案、準備、実行まで約1ヶ月しかなかった。そこで、今回は希望者のみの参加に留め、生徒会朝会において全校生徒に参加を呼びかけたところ、美術部員の中から28名が参加を申し出る。

#### **②図案の決定**

作品が、地域環境の一部を形成する美術作品として地域住民に不評な図案とならないためには、時間をかけ中学生と地域住民による図案検討場面設定が必要である。だが、先に述べた通り、日程的に困難であったため、図案検討、活動計画・運営の場面に教員が積極的に関わり、育成協会長から許諾を取り制作に入ることにした。

#### **③下準備 制作1日目**

トンネルはほとんど清掃されてこなかったため、汚れがひどくゴミが散乱していた。壁面への落書きを隠すためのペンキが塗られていたが、塗装が経年劣化していたり蜘蛛の巣があったり壁面と路面の境界に雑草が生えたりしていたため、直ちに制作に入れなかった。そこで、4グループに分かれ清掃活動を行い、グラインダー、サンドペーパー、へらを使い壁面全体の汚れを落とし、地塗り剤を塗布した。

#### **④描画1 制作2～3日目**

生徒たちは教員の考えた図案（図1）を参考に描きはじめた。図案は基底となる線をトンネル上下部に描き、見る人によって地域の心象風景（樹木や建物）を連想させるような三角、四

角、円などの幾何学模様を加えている。育成協会長は当初交通整理に徹し、生徒達に対し遠慮がみであったが、時には制作に関わり表現追求を相互に行うようになった。ここでは教員主導の活動である。

### ⑤描画2 制作4～6日目

教師の考えた図案を転写する様相から、生徒は徐々に形と色彩が織り成す表現の面白さを実感しはじめ、自分たちで課題を見つけ相互交流しながら表現する様相へと移行した。この段階では、教師が表現活動に関与する場面はほとんど無くなった。

### ⑥完成 壁画（高さ 2.6m、幅 38.8m）図2

図1は静かな印象を受ける形や色彩の美の構成要素（リピテーション、リズム）で構成されているのに対し、図2は上段右端にあるように、全体の中で形や色彩の変化や激しい動き（ムーブメント）、対比（コントラスト）、強調（アクセント）のある場面などで表現されている部分がある。

教員が考えた図案（図1）と完成した壁画（図2）を比較すると、教師の考えた図案が起点となり、生徒たちによって生み出された表現が随所に見られるのが分かる。

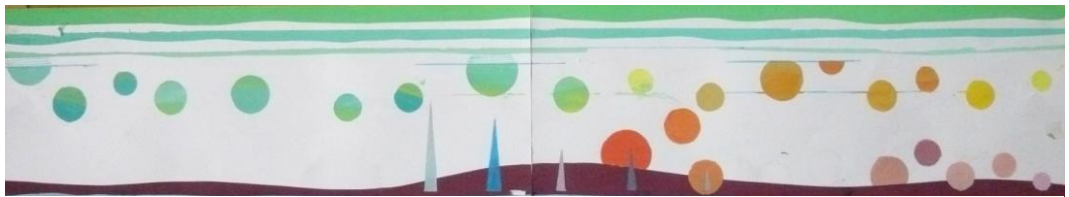


図1 教員が考えた壁画原画。



図2 完成壁画（トンネル壁画を分割撮影しパソコン上で加工。

上段：壁面に向かい左側 下段：右側）

### 3 実践結果

2012年12月10日、筆者による育成協会長へのインタビューを実施する。また、同年12月18日参加生徒（28名）に対しアンケートを実施し、同年12月26日にアンケート内容の確認インタビューを行った。アンケート実施の趣旨は、実践の効果を見極めるためである。本章では結果（育成協会長と生徒の回答はゴシック体の文字で表記）をもとに分析する。

#### (1) 生徒の反応

「壁画制作前と制作後とで何か違いを感じますか」の質問（自由記述）に対し「変化が無い」、「悪くなった」など否定的評価は無かった。

「トンネルは薄暗い感じで、少し怖いような、怪しいような感じでした。壁もボロボロで、それがみちがえるほど明るくなり、綺麗な感じになりました。カラフルな円や三角形が描かれていて、気分も元気になるようなトンネルになりました」、「来年は反対側のやっていない方をやればもっと良くなると感じた」、トンネル周辺に「以前は、不審者がたくさんでいたし、不気味だった。1人で通るのも、2人で通るのも怖かった。小学校の頃、そこを通るのに、親が迎えにきて下校することもあった。それが、壁画を描いて、トンネルの雰囲気が変わった。不気味でなくなったし、怖さがなくなった」。

薄暗く汚れていたトンネルが清掃され、雰囲気を大きく変化させる形や色彩が施されたことで心理的恐怖や不安を払拭し、気分を高揚させたり、安心感をもたらされたりしたことを述べる生徒や次年度以降の継続意思を示す生徒がいた。活動を通して壁画の形や色彩が環境（場）に与える影響の大きさを生徒らは感じた。

「初めてのことで、全員でできるか不安だったけど、1・2年生が積極的に協力してくれるようになりました」、「2・3年生と交流がなかったのが、声をかけてもらえるようになった」。

全員が、今まで話したことのなかった人と話すようになったと回答した。巨大な一つの作品を制作するためには、制作者どうしイメージを共有する必要がある。今まで交流の無かった者が意見交流する場面が必然的に生じ、お互いの心理的距離が縮まった中で活動展開した。

「大きなキャンパスに描く感覚が分からなくて不安がありました。でも、描いてみたら本当に気持ち良くて、また描きたいと思いました」、「作品を人前に出すことがなかったので、少し物足りなく感じていたけど、壁画をいろいろな人が見られるようになり、開放的な気分を感じるようになった」。



「めんどくさいと思っていたけど、絵の具で塗るのが予想と違って楽しくていい経験になった。(いろいろな人に教えてもらいながら) 前より筆がうまく使えるようになった」。

参加した生徒の感想で最も多かったのが、日頃の美術の授業では制作しない巨大壁画制作の面白さを知ったという回答である。高さ 2.6m、幅 38.8m の壁面に描く行為が、生徒にとってダイナミックで心引かれる活動であったことがうかがえる。題材の魅力や自分たちの作品が地域住民の目に触れることが制作意欲の喚起、美的要素の発見、筆遣いの巧緻性獲得へとつながったと述べる生徒がいた。しかし、本題材だけでは「発想・構想の能力」「創造的な技能」などの観点で生徒の能力の変容について見とることは困難である。今後の実践の中で検討する必要がある。

生徒に対する追加インタビューでは「街中にある美術作品を立ち止まり、その良さや改善すべき点を考える(評価する)ようになりましたか」の質問をした。その結果、評価するようになったと回答した生徒はいなかった。そこで「壁画などがあるといいなと思った経験がありますか」の質問をしたところ「家族と車で出かけトンネルを通ったとき、このトンネルだったらどんな絵が描けるか考えた」、「学校の廊下を通るとき、ここの壁に自分たちが描いたような壁画があるといいなと思った」と回答した生徒が2名いた。

場(環境)に働きかける意識を抱く生徒がわずかだが出現した点は成果といえよう。だがほとんどの生徒は、地域や街中にある美術作品や場(環境)を評価する意識が芽生えるに至らなかった。それは地域内の美術作品との関わりの不足ともとれる。この点はさらに検討の余地がある。

## (2) 育成協会長の反応

育成協会長からは「場の変化」、「壁画の内容」、「育成協にとってのメリット」、「今後について」回答を得る。

### ①場の変化

描いていただいて明るくなったし、子どもさんも、大人の方も、セーフティスタッフさんも自治会の役員さんも非常に喜んでいるという声を聞きます。住んでいる方からは、トンネルが明るくなったという話を聞くし、マイナスな話は聞こえてきませんね。以前は小学生が車に監禁されたり、中学生が体を触られたりという事件があった。今の所変な車は見かけなくなったし、相対的に見てトンネル内で停車している車は減りましたね。それから以前はトンネル内でゴミを捨てる人もいて、まるっきり無くなったわけではないけど減りましたね。ゴミを捨てづらい雰囲気になったんでしょうかね。

トンネル壁画が、育成協会長だけでなく多くの地域住民から好意的に受け止められていることが分かる。また、トンネル壁画が描かれた後は不審な車両やトンネル内のゴミが減るなど、防犯対策や環境改善に貢献していることが分かった。

## ②壁画の内容

先生方が中心となってそれをもとに生徒さんたちが臨機応変に描いていくスタイルが良かったと思います。地域と学校が1つになって動くというのが良かったです。大形独自の活動として定着するといったと思っています。他の地域では花を植えるとかいう話は聞くけど、このようなのは聞かないですね。事前に広報を流せば、地域の方で活動に加わりたいという人もいるかもしれない。そういう取り組みができるんだということを地域の役員、お年寄りも衝撃を受けたんじゃないでしょうかね。

トンネル壁画が地域の環境を形成する絵画としてふさわしいものとなるよう、教員の指導が入った点は良い評価として受け止められた。しかし、学校と地域が連携し運営される大形地区独自の活動としてより発展させるためには、地域の風土や歴史をより詳細に調査し図案に盛り込むべきではないだろうか。そのためには、中学生がより前面に出て住民へのインタビューや資料調査を行う場面の確保が必要と考える。

## ③育成協にとってのメリット

今回の壁画制作で地域の名前も、防犯組合も、コミュニティー協議会も新聞に載って名前が売れたので良かったです。活動の様子を具体的な形にもらったのを喜んでいます。学校の子どもたちだけでなく、地域の活動をPRできましたね。ここまで活動を大きくしてもらって良かったです。

学校と地域の自治組織が連携したことで活動が膨らみ、外部にPRできたことへの感謝の気持ちが述べられ、相互の開かれた関係の推進をより期待しているととることができる。

## ④今後について

他にも暗くて雰囲気悪いところがあり、やりたいところはたくさんあるので、今後も継続的にできるといいです。防犯上、すぐにやりたいところは2ヶ所です。余裕があればあと何ヶ所か。描いたのも劣化するので、数年周期で塗り直すようにできれば理想的ですね。予算は学校のPTAや、地域のいろいろな組織から出して、どんどん活動の輪を広げて将来的にこのような活動を通して地域がつながるといいですね。毎年あせらず少しずつ活動を広げていければいいですね。中学生が地域の中でこうやって活動ができるのがいいと思うんですよね。今回、中学生が入ってくれたのが何より良かったです。

一過性で終わるのではなく、活動を継続したいという意味と、そこに中学生が加わることで地域内の異年齢集団で活動することへの期待感が述べられている。拙速に活動を広めるのではなく、徐々に地域に根ざした活動の輪が広がることを期待していることが分かる。

### (3) 育成協会長のコメントに対する生徒の反応

「育成協会長のインタビューを読んだ感想を書いて下さい」の質問に対し、生徒たちから以下の回答（自由記述）を得る。

「地域のみなさんが喜んでくれて本当に良かったです。トンネルでの不審者、ポイ捨てする人が減ったので、活動したかいはありました。たぶん、美術部ができてから一番大きな活動だったと思います。この活動が最後でなく、ここからこの活動がスタートし、だんだんと広がって、市や県などで不審者被害、ポイ捨てをする人が減っていってこれればいいと思います。1、2年生は力を合わせて来年も実施して素敵なトンネルを増やしてほしいです。私は、この活動ができて地域のため、人のためになることができ本当に良かったです」、「1～3年生みんなで作る大きな作品ということで、とても楽しく、良いものができたと思う。それが防犯に役立ったり、雰囲気良くなったと言ってもらえると嬉しい。他にもやりたい場所があるのなら、ぜひやってみたい」。

生徒たちは、地域貢献できたことと、自分たちの活動が地域住民に好意的に評価されたことに対し達成感を感じている。また、次年度以降も活動を継続し、より豊かな制作活動と地域をさらに良くしたいという意味が表明されている。

### (4) 生徒の周囲の反応

生徒アンケートの自由記述の中から家族、友人の発言に関するものをあげると以下のものがあつた。

「お母さんと見に行ったとき『本当に明るくなった。地域の人自慢できるトンネルになってよかったね』と言ってくれました」、「友達から、『あのトンネル通るのが怖かったけど、今は通るとなぜか元気になる』と言ってもらえました」、「家の近所の人から『すごいね』『いいことしたね』と言ってもらえました。私自身、いろんな人からいい反応が来て嬉しかったです」。

いずれも好意的に受け止める意見であり、トンネルの変容を注視していたことが分かる。

## 4 実践題材の成果と意義

本章では、地域を活動の場とした中学生による美術作品制作から見てきた成果と意義を述べる。

### (1) 教育的意義（美術教育）

#### ①デザイン学習として

壁画制作後、生徒や地域住民からバイパス下トンネルの環境が良好なものへ変容したとの回答が出てきた。また、育成協会長のコメントにも地域の防犯上の問題、美化環境の変容についてのコメントが述べられた。これらから生徒は制作を通して、壁画が場に与える影響と自分たちの表現が持つ力を感じ取ることができたのが分かる。

生徒のコメント「次年度以降も継続して実施したい」、「地域のみなさんが喜んでくれて本当に良かったです」、「トンネルでの不審者、ポイ捨てする人が減ったので、活動したかいがありました」の言葉の裏には、無意識の中にも美術が持つ力を感じとったものと推察できる。それは、美術作品を媒体とし、自分たちが住む地域を変化させることが可能なこと、つまり、形や色彩がもたらす新たな空間創造が、地域の抱える課題解決につながる可能性の発見である。さらに言えば、生徒にとって実生活場面における美術の存在意義の認識へとつながるものといえよう。生徒は活動を通して、単に実生活の場でダイナミックな美術作品を制作できた達成感だけでなく、地域とのつながりを実感し、活動の意義を見いだした。具体的には、自分たちの活動や作品が地域に響くことや、人々と共鳴することの醍醐味を味わうことができた。これは、デザイナーの仕事そのものといえないだろうか。

本稿で取り上げた題材は「デザイン」の構成要素を学ぶための事前又は事後学習として位置づけることが可能である。

#### ②教材として

バイパス下トンネルという巨大キャンバスに描く活動は、生徒にとってダイナミックで魅力的な活動であった。魅力的な題材が生徒の活動意欲を喚起するのは当然のことである。本実践題材では具体的に何が要因となっていたのだろうか。それは、活動後の生徒のコメントに「作品を人前に出すことがなかったので、少し物足りなく感じていたけど、壁画をいろいろな人に見られるようになり、開放的な気分を感じるようになった」とあるように、作品又は活動そのものがリアルタイムで地域住民（育成協会長も含む）による評価対象となっていた点にある。地域（身近な現実世界）の中で、自分たちの制作した美術作品が、地域住民から好意的、又は厳しい評価を受けることを前提とし活動が遂行され結果が生まれる。本題材が生徒にとって自己満足やファンタジー（虚構）としての制作活動ではなく、リアリティー（現実）として制作活動の世界へ否が応でも引っ張り出される。それが、生徒の活動への意欲につながるとともに、取

り組む姿勢の真剣さを引き出す要因となったのではないだろうか。

また、活動を通して「前より筆がうまく使えるようになった」と述べる生徒がいた。ほとんどの生徒にとって刷毛を使って壁画を描くことは初めてのことであった。また、1年生にとってはマスキングテープの使用は初めての経験であった。作品制作する際必ずしも否定すべきものではないが、時として美術室内の授業では断片的に「技能」を指導してしまうことがある。創造的な雰囲気の中であったからこそ、生徒らは自ら求め技術（「創造的な技能」）習得しようとする姿が見られたと考える。

### ③地域を活動の場とした共同制作における学び

本実践では、制作する上で必要な創造的な技能（刷毛や筆の使い方、マスキングテープ、描画のための手の巧緻性）習得の問題がほとんど生じなかった。同学年間で、異学年間で用具の使い方等を教え合う姿があったからである。筆者の日頃の美術室での授業を振り返ると図3において、プロットB'（教員主導による活動）になることがある。本題材では当初はプロットB（教員主導の活動）であった。だが、徐々にプロットA（生

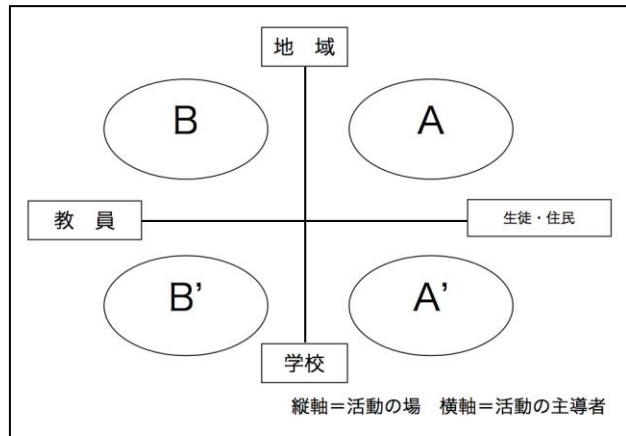


図3 活動の場と主導者を軸とした授業形態のプロット。

徒や住民主導の活動)に移行していった。オープンな雰囲気の中で活動することで、生徒どうしの学び合いの場面が生まれたものとする。オープン（創造的）な雰囲気を作り出す上で学校を飛び出し地域に活動の場を求めるのは有効な手だての一つとなりえるのではないだろうか。

なお本実践は育成協会長と美術科担当教員との雑談がきっかけとなり実現に至った。それは偶発的かもしれない。だが、日常的、継続的に筆者と育成協会長が雑談できる関係が構築されていたのは偶発的ではない。地域を活動の場とした題材を実現するためには、まずは教員が地域に飛び出し、地域住民と日頃から関わり信頼関係を構築する必要がある。

## (2) 教育的意義（生徒指導的機能）

前節で触れたように、生徒は「自分のため」でなく「地域のため」の視点で活動に取り組み、自分たちだけでなく、他者（地域住民）も納得させる作品を完成させることができた。それは、社会の中における自己存在感（自分の存在意義の自覚）へとつながるものではないだろうか。日頃の教育活動の中で自己肯定感の低い生徒（「自分はいなくてもいいのではないか」「自分はどの役にも立たない存在」など自分を否定的に評価している生徒）にとって、社会に関わり貢

献していることを実感できる活動となり得る。また自分たちの手で地域を変えることができるという実感もあり、よりよい社会を創り上げようとする意識を醸成する題材となった。

また活動を通して新たな人間関係が生まれた生徒がいた。類似した活動を学校の中で行う場合、生徒を評価する人間は生徒と教員となりがちである。すると、評価される生徒に心理的な甘えが生じ、他人任せの言動をする生徒が生じ、チームワークがうまくとれないことがある。本実践では6日間活動をともした育成協会長以外にも近隣住民や通りがかりの人が差し入れをしてくれたり、励ましの言葉をくれたりした。そのことで、生徒はより多くの人から評価されることを実感した。個々の生徒は自分の言動に責任を持つことが求められるようになり、チームワークが円滑に運び心理的距離が縮まる要因となったのではないだろうか。6日間に渡り、ほぼ同じメンバーで制作する地域における活動が、生徒指導的観点から意義ある活動であったことがうかがえる。

### （3）実践題材の意義

「総合的な学習の時間」における地域の事業所での職場体験活動や、各教科での学習支援ボランティアなど、地域の教育力を活用した事例は多い。勤務校でも地域の教育力がさまざまな場面で活用されている。大きくは「学校のニーズが起点となり学校が地域から支援を受ける形態」と、「地域のニーズが起点となり学校が地域に貢献する形態」に分けることができよう。本実践題材は後者の形態であった。中学生による美術作品制作を通して、地域の防犯、地域環境の改善につながった。中学校における美術教育においても地域貢献型の活動をさらに模索すべきではないだろうか。学校と地域住民が課題を共有し、解決に向けできることを美術作品制作の中に求めることは、中学校における美術教育の意義を浮き彫りにし、それが管理職や他教科教員による美術科への理解につながり、活動の幅をさらに広げることになると考えるからだ。

中学校と地域それぞれの持つ強みを活かすことで、今後さらに多様な展開を進めることが可能と考えられる。教員が持つ強みとは「作品制作に必要な知識・技能」、「中学生への対応能力（学習指導的観点）」、「授業実践経験の豊富さ」、育成協会長が持つ強みは「予算確保力」、「地域住民との交渉力」、「日常生活において生徒達と関わる能力」である。さらに、地域の自治組織が、地域住民に対し中学校の活動に対する理解を得るための役割を果たすことを再認識できた。

育成協会長が美術科担当教員との雑談の中でトンネル壁画制作を中学校に投げかけてきたことや、インタビューで「中学生が入ってくれたのが何よりよかった」と回答したのは、中学生（中学校）が地域に関わることを期待するとともに、地域住民によって地域の中学生を育てたいという意思の表れである。また、地域住民の反応に、地域の環境（場）の変化を歓迎するコメントが述べられている。さらに、それらを受け生徒からは次年度以降も同様の取り組みを続けたいという意思表示が示された。新聞によって活動が取り上げられ、外部にPRされた<sup>17)</sup>ことも今後活動展開する上で、勤務校の教員・生徒、地域住民に対する活動への理解と協力を得

るのに有効に働くだらう。これらは、活動を継続する上で大きな原動力となるものである。活動方法に改善の余地が残るものの、今後継続実施できる可能性も確保できた。

以上のことや、3章(1)での生徒の反応や育成協会長が今後の展開について述べた「中学生が地域の中でこうやって活動ができるのがいい」から、「生徒が地域によって育てられる」ということが言えよう。また、育成協会長が「地域のみなさんが喜んでくれて本当に良かった」や「中学生が入ってくれたのが何よりよかった」と述べたことから、「地域の美的環境、生徒に対する地域住民の意識が変容する」が言えよう。

「生徒が地域によって育てられる」ということと「地域の美的環境、生徒に対する地域住民の意識が変容する」が循環しながら生徒と地域が年々より良い方向に変容し、図3のプロットA「生徒・住民が中心となって地域の中で行う制作活動」へとシフトする可能性が見えてきた。それが、本実践題材を通して見えてきたもっとも特筆すべき意義である。

## おわりに

最後に、実践を通して見えてきた課題を述べ本稿を締めくくる。

活動の前半（図案検討の場面）で教員主導となった点が最大の課題として残った。先に触れたように生徒が地域（地域住民）と関わり、その地域ならではのテーマを見だし、地域住民と自分たちの想いを交流させる場面を活動に盛り込むと、日常生活における美術作品を含むさまざまな場（環境）を評価する視点がいつそう養われるはずである。次年度以降の実践では、生徒が地域住民と直接やり取りする（生徒を前面に出す）場面設定が必要と考える。

生徒がトンネル壁画の図案を考えること（「発想や構想の能力」を高める場面）を保障するための手だての一つとして、美術の授業とリンクさせることが考えられる。具体的には、学習指導要領第2章第6節美術の第1学年の学習内容「目的や条件などを基に、美的感性を働かせて、構成や装飾を考え、表現の構想を練る」<sup>18)</sup>題材としての位置づけである。また、地域のニーズや歴史、風土を発想の起点とするなど授業展開上の工夫も加味する。その後、壁画制作に関わることが可能な生徒と地域住民が話し合う場面設定をし、作品のイメージをブラッシュアップし原画を完成させる。

また、地域を活動の場とした際、中学校美術科に求められる学び（形や色彩、材料、光などの性質の理解）がどの場面で形成されていくかに焦点を当てた検討、例えば、トンネル壁画の変容が生徒の「鑑賞の能力（美的観点）」にどのような学びをもたらすかについての検討も必要である。

今後は課題を踏まえた教材研究をし、さらなる実践と結果の考察を加えたい。

## <注>

- 1) 新潟市中学校教育研究会美術部会に所属する美術科担当教員によって投稿された実践事例をまとめた冊子。1人1事例を原則とし発表している。
- 2) 1人で3事例のものは例外的である。法的に求められているが、このような実践に対する教員が苦手意識を持っている表れといえる。
- 3) 文部科学省 HP。  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/07110606/005.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/07110606/005.htm) 2013.6.25 閲覧。
- 4) 同上。
- 5) 新潟市内全域を主会場とし、新潟市主催で開催されている芸術祭・現代美術展である。第1回は2009年に実施された。
- 6) 2013年1月12日筆者による丹治嘉彦に対する「芸術祭に対する市民の関わりはどのような状況がありましたか」のメールによる質問に対する回答より。
- 7) 2013年7月29日筆者による丹治嘉彦に対する「市民の関わりの変容を示す具体的な事例はありますか」のメールによる質問に対する回答より。
- 8) 林容子『進化するアートマネジメント』レイライン 2004、p.202。
- 9) 森俊太 川口宗敏 的場ひろし、「パブリックアートと地域社会に関する学際的研究」『静岡文化芸術大学研究紀要9』、静岡文化芸術大学 2008、p.80。
- 10) 同上。
- 11) バーナード・クリック 訳・解説 添谷育志 金田耕一『デモクラシー』岩波書店 2004、p.198。
- 12) 同上。
- 13) 柴田義松『ヴィゴツキー入門』寺子屋新書 2011、p.167。
- 14) ハーバード・リード 訳 宮脇理 岩崎清 直江俊雄『芸術による教育 Education Through Art by Herbert Read』第2版 フィルムアート社 2001、p.276。
- 15) 川崎市立臨港中学校 HP。  
<http://www.keins.city.kawasaki.jp/3/ke300501/index.html> 2013.11.1 閲覧。
- 16) 「地域とともに生きる美術教育」『中等教育資料』文部科学省 ぎょうせい 2006、pp.28-33。
- 17) 活動の様子が2012年8月6日朝日新聞と同年8月16日新潟日報に掲載された。
- 18) 文部科学省『中学校学習指導要領の解説 美術編』日本文教出版、2008、p.80。

主指導教員（雲尾周准教授），副指導教員（佐藤哲夫教授・柳沼宏寿教授）